

10 シェイクスピア —人と作品

ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) は、イギリスの劇作家、劇団経営者、役者を兼ねる演劇人であり、詩人でもあった。

● 経歴

イギリスの中部の田舎町ストラットフォード・apon・エイヴォンに、1564年4月に生まれ、26日に洗礼を受ける（誕生日は不明）。父は皮手袋商人で町の有力者、母は非常に裕福な農場主の娘であった。グラマー・スクールでラテン語を学んだ後、1582年、18歳で26歳のアン・ハサウェイと結婚して6か月後に長女が生まれ、2年後には双子の男女の父となった。1590年代前半には故郷に家族を残してロンドンに出て演劇の世界に身を置く。宮内大臣一座および国王一座の脚本家として、生涯で共作も含めて約40の劇作品を書いた。また、長編物語詩や恋愛詩も書いている。1613年頃引退し、1616年4月23日に故郷で没した。

● 劇作品解説

年代順に、主な劇作品について述べる。この時代の作品は書かれた年がわからないことも多いが、本稿では Wiggins の *British Drama: 1633-1642* の推定年代を採用する。

1590年代前半には、主に歴史劇 (*histories*) や喜劇 (*comedies*) が書かれた。ヨーク朝最後の王を、兄や甥達を陥れて殺しながら王位を得る非道の人物として描いた『リチャード三世』(*Richard III*, 1593) や、強情な女性と強引に結婚した男性が、彼女を力業で従順な妻に変える『じゃじゃ馬ならし』(*The Taming of the Shrew*, 1592) などがこの時期の代表作である。

1590年代半ばからは、数多くのロマンティックな劇が書かれた。敵対する2つの名家の一人娘と一人息子が恋に落ちてから死ぬまでの悲劇『ロミオとジュリエット』(*Romeo and Juliet*, 1595) が最も有名かもしれない。この時期には『真夏の夜の夢』(*A Midsummer Night's Dream*, 1595) を始めとするロマンティックな喜劇群が生み出された。主人公の女性が男装して少年のふりをする手法が多用され、たとえば、『お気に召すまま』(*As You Like It*, 1600) や『十二夜』(*Twelfth Night*, 1601) では、ヒロインが女性であることを隠しながら恋する男性と過ごし、ヒロインを少年と思い込んで恋する女性も登場する。当時のイギリスでは女性が舞台に上がる事が禁じられていたため、少年俳優が女性を演じており、女性登場人物の男装

は少年俳優の中性的な魅力を最大限に引き出していたのである。これらのロマンティックな喜劇は、何組ものカップルの幸せな結婚で終わる。だが喜劇には時に影の部分も含まれる。たとえば『ヴェニスの商人』(*The Merchant of Venice*, 1596)は、借金のかたに肉一ポンドをとるという契約を盾に商人アントニオを殺そうとするユダヤ人シャイロックが、少年法学者に扮した女性に阻まれるという物語だが、悪役であるはずのシャイロックがユダヤ人であるがゆえに不当に虐げられる苦しみも真に迫って描かれている。

1600年前後には悲劇(**tragedies**)の時代が始まる。『ハムレット』(*Hamlet*, 1600)は、王子ハムレットが、父親を殺して王位と母を奪った叔父に復讐するまでの物語である。狂気を装いながら復讐の機会を伺う憂鬱な主人公の台詞や行動、多くの印象的な場面に満ちたこの劇は、多くの人々を惹きつけ、時代と共にさまざまな解釈を生み出してきた。『オセロー』(*Othello*, 1604)は、ヴェニスのムーア人の将軍オセローが、旗手イアーゴーの姦計により、妻のデズデモーナが浮気していると信じ込み、殺してしまう悲劇である。『リア王』(*King Lear*, 1605)では、老王リアが、三人の娘のうち最も親思いの末娘を誤解により追放し、姉娘二人に王位と領地を譲った後、何もかもを奪われて城を追い出され、人間の尊厳をはぎ取られて狂乱する。末娘コーディーリアと再会してつかの間の幸せを味わうも、コーディーリアは殺され、リアも悲嘆のあまり死ぬ。『マクベス』(*Macbeth*, 1606)では、三人の魔女から王になることを予言されたマクベスが主君を殺し王になるが、罪の意識に苛まれつつ、権力を保持するために虐殺を繰り返し、最後には殺される。

1607年頃からは、ロマンス劇(**romances**)と呼ばれる新しいタイプの劇が生み出された。現実離れしたおとぎ話的な要素が強く、神託や魔法などが登場し、最後は家族が再会し、和解する。1611年の『あらし』(*Tempest*, 1611)では、追放されたミラノ大公プロスペローが妖精エアリエルに命じて嵐を起こし、自分を陥れた弟やナポリ王らの船を難破させ、島に上陸させて魔法で錯乱させる。最後には敵を許し、娘ミランダをナポリ王の息子と結婚させるために故郷に帰る。シェイクスピアは『あらし』の後に後輩の劇作家と少なくとも2作品を共作しているが、この劇が最後の単独作である。このため、劇の最後に魔法の杖を折るプロスペローと、引退して故郷に帰るシェイクスピア自身が重ねて語られることが多い。

(辻川 美和)